

2015年度ランゲージラウンジ活動報告

教養教育センター ランゲージラウンジ運営委員会

1. 総括

2008年に始まったランゲージ・ラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて学生たちが自律的に学習できる環境をつくることから始まった。現在では、英語はILSSP (Independent Language Study Support Program) を開設し、学習者自らが具体的な目的を設定し、その目的に向かって定期的にチューターと面談しながら学習するプログラムを展開し、自律学習実践の手助けを行っている。

英語以外の外国語では、言語ごとに曜日、時限を決めてネイティブスピーカーの会話実践の場、オンライン学習の学習補助の場を提供したり、日頃の学習の補足を行ったりしている。

以上のように、現在、各外国語がそれぞれ独自の事情を考慮しておこなっている。次年度については、留学生との交流の場などを増やし、言語がコミュニケーションの道具であることを実感できるような場を増やすことを目標に、多様な外国語支援活動を行っていきたい。

2. 活動詳細

2.1 英語部門：高桑光徳

英語部門では、昨年度に引き続き、英語の自律学習を1学期間にわたってサポートするIndependent Language Study Support Program (ILSSP) と、昼休みに英語による学術的な講義を聴講するLuncheon Lecture Seriesを主要な活動の基軸として実施した。

まず、毎年度、参加した学生から高い評価を得てきたILSSPは、今年度も春学期と秋学期の2期にわたり実施した。毎週月曜日の11:00-15:30をコーディネーターの山森由美子氏（本学非常勤講師）が担当し、毎週木曜日の11:00-15:30をコーディネーターの坂井誠氏（本学非常勤講師）が担当した。各学生が設定した学習目標を達成すべく、ポートフォリオを活用して自律学習に励むことができるように学習支援を行った。学生の選抜方法は、従来通りオリエンテーションを行い、募集と選抜を行った。採用予定人数を大幅に超える多くの応募があったことから、登録希望者に英語学習に対する熱意を調査用紙に記入してもらい、その内容を勘案した上で選抜した。各学期の参加者数の詳細は表1のとおりである。

表1 ILSSP実績

実施期間	参加者数
春学期（5月-7月）	24名 [文学部5、経済学部4、社会学部1、法学部5、国際学部9]
秋学期（10月-1月）	24名 [文学部7、経済学部3、社会学部3、法学部3、国際学部6、心理学部2]

2015年度もLuncheon Lecture Seriesを春学期2回、秋学期3回の計5回開催した。テーマはバラエティに富んでおり、本学非常勤講師が英語によるレクチャーを行った。考古学の実情やあまり知

られていない日系カナダ人の歴史、英語の勉強法などの様々なトピックがあり、非常に充実したシリーズになった。パワーポイントやビデオを活用したレクチャーが多く、楽しみながら、英語のレクチャーに耳を傾ける機会を学生に与えることができた。来年度も学生の興味をひくような幅広いテーマによるLuncheon Lecture Seriesを予定している。

表2 2015年度Luncheon Lecture Series実績

	日付	タイトル	講演者	参加者数
第1回	5/28	Leaving Mr. Jones Behind: A Brief Introduction to Real-life Archaeology	Dax Thomas (本学非常勤講師)	111名
第2回	6/9	Wolf: Endangered & Still Vilified	Trazi Williams (本学非常勤講師)	156名
第3回	10/28	Japanese Canadians: Their History and Education	Aya Iino (本学非常勤講師)	75名
第4回	11/9	Funny English in Japan: Are You Sure Your English is OK?	Makoto Sakai (本学非常勤講師)	53名
第5回	12/4	Literature as Performance: Why Are You Reading This?	Patricia Yarrow (本学非常勤講師)	60名

2.2 ドイツ語部門：吉田真（経済学部）

2015年度ランゲージラウンジ(ドイツ語部門)は「ドイツ語 de ランチ」と題して、森本康裕氏(本学非常勤講師)が毎週金曜日の昼休みに行なった。毎定期的に参加する学生の人数は年間を通して3~5名程度であった。参加者は大半がドイツ語初級を履修している1年生の学生だったが、ドイツ語を履修していない学生も数名参加していた。

教材として『独検過去問題集』(郁文堂刊)を利用し、ドイツ語リスニングとならんで重要なフレーズや単語の確認、すでに授業内で学んだ文法事項の簡単なおさらい、典型的なドイツ語の言い回しなどを学習した。また、現代ドイツを舞台とした映画を鑑賞し、参加者の間で意見を交換しあった。本講座では春秋両学期を通じ、授業時に学んだ基本的なドイツ語文法の復習やその応用のための機会を提供すること、参加者がドイツ語やドイツ文化に親しみをもってもらえるように努めること、そして参加者のドイツ語学習へのモチベーションを高めることを目標とした。

2.3 スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、ランゲージ・ラウンジのスペースの利用、時間帯等を考慮して、自律的な学習をより効果的に行える「オンラインコース」：スペイン文化センターが開設しているAVE (Aula Virtual de Español) への受講によって自律学習を促している。春学期、秋学期に10名程度受講した。

今回初めての試みとして、スカイプ授業との併用を行い、ネイティブスピーカーの講師との会話によって、学習のモチベーションアップにつながった。次年度はこの講座をどのように利用するか
の検討が必要と言える。

この講座では、予め様々な学習教材が用意され、学習者が自由にページにアクセスして学習する
方法になっている。今後は、スカイプ授業の導入をどうするか、またこの学習を実際のコミュニケー
ションの場に結び付けていくか、ランゲージ・ラウンジの他の活動とどのように有機的に結び付け
ていくかなどの工夫が必要だと思われる。

2.4 中国語部門：洪潔清

2015年度の中国語部門「中文会話倶楽部」は、昨年度と同様に、毎週木曜日の昼休みに横浜校舎
1号館138教室で行なった。留学生を中心に担当してもらい、春学期と秋学期それぞれ13回ずつ開
催した。参加者は平均して16名あった。多い時には20名以上にも上り、教室を埋め尽くすほどの人
数で、大変賑わっていた。参加者の多くは4月から中国語を履修した1年生であるが、そのほかに、
協定校から来る交換留学生や中国での留学を経験した学生、全く中国語を履修していない学生まで
も参加していた。

活動の内容については、従来通り、授業内容の補習や相談、実践的な会話の練習などが行われた。
それ以外に、今年度は新たに留学生による現代中国事情や中国文化の紹介を加えた。その背景には
中国語を勉強し始めたばかりの学生にリアルな現代中国を知ってもらい、中国に対する関心を持っ
てもらいたいとの意図があったからである。実施手順としては、まず担当者同士が相談してテーマ
を決め、映像とパワーポイントを使って説明をした。具体的な内容として、①語学関係については、
挨拶表現、家族呼称の言い方、日中同型四字熟語と日中擬音語などを、②文化については、歌や故
郷、食文化、少数民族と漢民族の衣装、日本と中国との干支の関係、中国の旧正月春節などを紹介
した。さらに、中国の若者の間で流行していることや新しいネット用語など、現代中国のトレンド
なども同世代の日本人学生と共有した。

こうして短い50分間に、参加者たちが歌ったり、新しい言葉の発音を練習したり、日中文化につ
いて話し合ったりして、楽しい一時を過ごすことができたようだ。ある日本人学生は、「中文会話
倶楽部で、中国についての知識が深められ、留学生と交流することで、中国語の授業の内容が身近
に感じられるようになった。」と感想を語っていた。また、ある中国人留学生は、「日本人学生に紹
介しようとすることで自国文化を再発見することができ、さらに、それを日本語でプレゼンテーショ
ンをすること自体、自分にとって非常に良い日本語の練習機会であり、次年度もさらに頑張ってい
きたい。」と抱負を語っていた。

一方、倶楽部の課外活動の1つとして、今年10月に神奈川県日本中国友好協会が主催した「第33
回全日本中国語スピーチコンテスト神奈川大会」を学生に紹介し、朗読発表会に3人の1年生が参

加した。中国語知識ゼロから始まって4ヶ月しか経っていない学生にとって、参加すること自体が大きなチャレンジだったと思われる。倶楽部の活動時間内に留学生が一对一で丁寧に発音の指導を行ない、またリハーサルにおいても、指摘されたところのさらなる習得にも努めた。残念ながら、優勝にこそならなかったものの、参加者全員は、朗読発表会が今後の中国語学習に非常に有意義であったと感じたようだ。上級者のスピーチを多く聴くことで、表現方法の広がりを感じることができ、スピーチで使われた単語が中国語の授業中に出てくるとすぐに反応ができるようになったと実感したようだ。朗読会を通じて自分の弱点に気づき、何事も1つのことを会得するには、向上心をもって不断の努力を怠らないことが重要だと痛感したようだ。

さらに、今年はまだ一つの課外活動として、日中科学技術文化センターが主催した「日中青年友好交流訪中団」に、3人の学生を推薦した。彼らは、中文会話倶楽部にも頻繁に参加し、特に積極的に中国語を勉強しようとする学生である。今回の訪中団は、中国のありのままの姿に触れ、日中関係の相互理解を若い世代から深めていこうというコンセプトのもとで企画され、12月23日～29日に上海と江蘇省を訪れ、現地の大学生との交流、現地の日系企業への訪問、中国の文化・歴史・自然などの参観など幅広い活動を展開した。帰国後、参加した3人は、今年度最後の中文会話倶楽部の活動時間に自分の訪中体験を報告し、倶楽部に参加した学生達と共有した。

日中関係の政治的なすれ違いがマスコミに取り沙汰されている昨今、今回の訪中団に参加することにより、自分の目で観察し、自分の体で感じるさまざまな体験が参加者にとっては、非常に貴重な経験であった。とりわけ、日本では、中国本土の大学生との触れ合いは、あまり体験できないことで、交流会で、日中文化の相違点について理解・共感し、且つ中国人学生とおおいに交流を深めたことは日本人学生にとって大きな収穫の1つであることがアンケートの記述から読み取れた。

具体的に、3人の学生はそれぞれ訪中の感想を以下のように語った。訪中前に、「中国人は、無愛想で怖い」という印象を持っていたMさんは、現地で、優しく対応し、或いは日中関係を良好にしようとする多くの人々と接して、「自分も自然に笑顔になり、ありのままで話すことができた。訪中前と全く違う印象を持つことになった。」と感想を語った。自分の語学力の拙さを痛感したYさんは、「次回中国に行く時、少しでも話せるようになるよう、これからも中国語の勉強を続けたい。」と強い意気込みを語った。何度か中国に訪れたことがあるHさんは、中国の発展が想像以上のテンポで進んでいると思いながらも、インフラの整備など、まだまだ成長する余地があることや、人々のモラルにも未成熟な部分があることに気付くことができた。

総じて言えば、今回の訪中活動を通じて、参加者3人が以前より中国や中国語に対して強い関心を持つようになり、国際意識も高まったと見られる。

2.5 韓国語部門：金珍娥

2015年度韓国語ランゲージ・ラウンジは横浜校舎において以下のような日程と体制で週1回実施

した：

●横浜校舎

担当講師：高槿旭（コグヌク）

実施期間：春学期 2015年4月24日～7月17日（毎週金曜日）

秋学期 2015年10月2日～12月18日、2016年1月8日（毎週金曜日）

教室：明治学院大学横浜校舎 138教室

時間：12時30分～13時20分

人数：春学期 5～6人 秋学期 4～5人

担当講師の高槿旭先生から以下のようなことが伝えられた：

話す能力の向上を最大の目標とし、以下の内容を中心に進めた。

1. 韓国語の単語や人物、料理などの絵について韓国語で説明、語り合う

韓国語圏における絵付きの単語カード、人物、料理などの画像をダウンロードし、タブレットを用いて、提示された単語や絵について話す練習を行った。一人が単語について説明し、他の学生たちが質問するなどして単語の意味を当てるクイズ形式を導入した。

絵を用いることにより、韓国語の初級者でも意味を推測することができ、学生全員の積極的な参加が見られ、楽しく遂行することができた。討論などでは、「何を話せばいいかわからない」「思い出せない」など、消極的な態度も少なくないが、「絵を説明する」といった明確な目標を立てることにより、活発に進めることができた。

2. ① 趣味、② 仕事、③ 思い出といったテーマで討論を行う

①、②、③のそれぞれのテーマについて実施した。身近なテーマについて話すことにより、自分に関わる表現であるという意識から真剣さや能動性が確保され、とりわけ語彙力を中心に表現力を高めることができた。夏休みに韓国に短期留学を終えた学生が数人存在したことも効果的に作用し、全員が積極的に参加、総体として各自の話す能力が高まったと言える。